

# 天安門事件の証言者は語る

事件当日、広場に最後までいた侯徳健氏に聞く

日比野 晃

はじめに

一九八九年六月四日未明、中国の首都北京の天安門広場において「民主化」運動を推進していた多数の学生・市民が、戒厳軍により「虐殺された」と、日本の多くのマスメディアが報道した<sup>1)</sup>。

しかし、その四年後の一九九三年六月三日、NHKがクロージアップ現代で「天安門事件・空白の三時間に迫る<sup>2)</sup>」を放映し、天安門広場では死者は出なかったことを証明した。

それは事件当日、天安門広場で取材を指揮したスペイン国营テレビの極東支局特派員ファン・レストレポ記者の証言及び広場での映像と、同じく広場に最後までとどまって学生達を無事に広場から撤退させた台湾のシンガーソングライター侯徳健の証言に基づくものであった。

「学生を軍隊は戦車で押しつぶした」と涙を流しながら訴える柴玲と、「少なくとも見積もって、広場の中で千人が殺された」と言うウアルカイシの映像と音声<sup>3)</sup>が記者会見のかたちで、事件直後に流され

ている。しかしこの「民主化」運動の学生リーダーであった二人は「虐殺があった」といわれる時間帯には現場にいなかったこと。そして、死者が出なかった背景には、広場に隠されていた多数の武器を破壊処分し、学生が広場から撤退する交渉を戒厳軍として、発砲されない約束を取り付けた侯徳健の行動があったことも、この番組は示している。

多数の人命を救ったにもかかわらず、NHKが取り上げるまで日本ではほとんど知られていなかった人物、また、NHKの放映内容以上の事実を知っているであろう人物、侯徳健氏を私は台湾に訪ねることにした。

なお、この会見には侯徳健氏の友人王星威氏も同席し、本学の卒業生である林清祥氏・郭庭志氏に通訳・ビデオ撮影をもらった。本稿は、会見内容をより正確に再現するために、国語学が専門である洪競春氏に二〇〇〇年十一月十一日に録画したビデオの会話を翻訳してもらい、それに基づいて原稿化したものである。

以下、会話中の（ ）内は筆者が補足したものである。

**日比野** お会いできて大変に嬉しいです。

早速なんです、NHKのクローズアップ現代「天安門事件・空白の三時間に迫る」(以下、「NHK放送」という)において、侯徳健さんが証言された内容は正確に伝えられておりますか？

証言内容が間違つて翻訳された箇所とか、削除された箇所がありましたら具体的に教えてください。

**侯徳健** NHKがちょうど放送していた時、私は日本である映画の製作に当たっていましたので、全部見ることが出来ました。また、友達が訳してくれました。内容は完璧で、重要なところがちゃんと載っていましたので問題はないと思います。

**日比野** 「NHK放送」の中で、侯徳健さんが「私達は当時の学生リーダー柴玲さん達を探し出しました。誰であろうと子供達や学生や市民の命をもてあそんだり賭けに使つてはいけなし、そのような権利はないと説得しました」と言われております。

柴玲さん達は何をしようとしていたのですか？

**侯徳健** これはとても大きな問題だと思います。実は柴玲さんから聞いた話ですが、趙紫陽(党総書記)が彼らにいつまで頑張れるのか、もし出来れば夜明けまで踏んばつて欲しいと言つたということです。

**日比野** 頑張るとは？

**侯徳健** 出来ればもっと長い時間、座り込みを続けてくれという意味だと思います。

その当時、私達は柴玲さんが言っているのが事実であつたかどうかは確認できませんでした。というのも、柴玲さんも他人から聞いた話だと言つていたからです。当時天安門広場では様々な情報や流言飛語が錯綜していましたからね。

**日比野** 侯徳健さんは柴玲さん達に「学生や市民の命をもてあそんだり賭けに使つてはいけなし」と忠告されたわけでしょう。ですから、ただ「頑張る」だけでじゃなくて、もっと過激なことを考えていたんじゃないかと僕は判断したわけです。柴玲さん達は一体何を考えていたのか、もしご存じだったら教えてください。

**侯徳健** その時、天安門広場の学生達は真つ二つに別れていました。つまり、過激派と穏健派というふうには。過激派であつてこそリーダーになれるわけなんです、柴玲さんはどちらかと言うと過激派だつたと思います。過激派は感性的ではあつたけれども、どういふふうにものごとを進めて行けばいいのかわからないようでした。つまり、中国の変革を求めていたものの、そのやり方がわからず、ただいらいらして、一夜にして中国が変わることを望んでいただけです。あたかも中国の多数の人達から声援を受けているかのように。ある意味では、天安門事件そのものは中国共産党の長年の統治による、国民の恨み、すなわち、怨念の表れかも知れません。

**日比野** 具体的にどんな不満と恨みがあつたのですか？

**侯徳健** それは恐らく毛沢東時代からのものであると思います。それが鄧小平の時代になって急ピッチで発展を遂げ、随分良くなつたと皆思つていたはずなんです。しかし、インテリや学生達は鄧小

平の改革のスピードが遅すぎるとクレームをつけるようになり、私達のような穏健に物事を運ぼうとした人達は彼らの目には裏切り者として映ったわけです。

**日比野** 「NHK放送」によると、天安門事件当日、数人の学生が人民英雄記念碑の上や広場に多数の武器が隠されているのを報告してきました。侯徳健さんと北京師範大学の劉曉波さんは一時間、わたって学生達を説得して全ての武器を回収することに成功し、劉曉波さんがその場でその武器を破壊することを提案して実行しています。

この武器は、誰たちによって隠されていたとお考えですか？

**侯徳健** その武器のことですが、それも二つに分けて説明する必要がありますかと思いますが、その一つは戒厳軍が所持していたもので、例えば歩兵銃や機関銃等がそれです。私はピストルは見ておりませんが、それらの武器は労働者達が広場から遠く離れている所で軍と衝突した時に奪ってきたものです。もう一つは軍が撤退する時に捨てたものですが、弾丸は入っていませんでした。

**日比野** それは実際に見られたのですか、それとも誰かから聞かれたのですか？

**侯徳健** テレビで見ました。学生達が拾った武器をトラックに乗せて軍に返しに行くという場面は写っていたけれど、それを受取る場面はなかったと思います。それはいずれも六月四日前に北京テレビが流したもので、学生達が沢山の武器を政府に返したという場面はあつたけれど、誰に返したのかはつきりいってわかりません。

戒厳令は五月十八日から六月十日にかけて敷かれていたんですが、この二十日間戒厳軍は学生弾圧に消極的であつたので、軍と学生の間には衝突も起こらず、政府としては軍に対する指揮能力すら失っているようでした。それは学生達が一般市民に軍と衝突を起こさないよう頻繁に呼びかけたからかも知れません。一般市民とは、学生を支持していた人達のことです。当時、政府は学生運動を動乱であると決めつけ、それによって北京は混乱状態に陥つたと主張していましたが、それどころか、その二カ月の間は泥棒でさえも盗もうとしなかつたぐらい治安が極めて良かったので政府は困惑して、たと、聞いています。学生達は攻めようともしない、暴れない、ひたすら座り込みを続けていただけだったので、秩序には何の影響もなく、政府としては弾圧する正当な理由づけがでなかつたでしょう。しかし、他方では時間が長くなるにつれ、一般民衆に対する管理が難しくなり、コントロールができなくなったのも事実です。例えば、一部の攻撃的な労働者達や北京の市民オートバイ部隊の行動などがそれでありませうけれども、学生達やまともな市民の軍との衝突が起ころなかつたのが救いだつたと思います。

**日比野** この「NHK放送」にはありませんが、これ以前に柴玲とかウアルカイシはしばしば記者会見している。その時に「どこから援助されていますか？」という取材者側の質問に対して「されている」と答え、「どこから援助を受けているのか？」の質問には「言えない」と答えています。

彼らに外国からの援助もあつたと侯徳健さんはお考えですか？

もし、事実を知っておられたら教えてください。

**侯徳健** それも二つの問題。つまり、その援助というのは広場にいた時のことですか、それとも逃亡する時のことですか？

**日比野** いや、天安門事件以前のインタビューで彼らが答えているわけで。

**侯徳健** その中の一つの件については、私は天安門広場で聞いております。そのことを耳にする前までは、私は傍らで彼らの様子をずっと観察していたのです。ある夜のことでしたが、ウアルカイシが拡声器を使って広場にいた人達に「若し戒厳軍が攻めてきたらアメリカ大使館まで撤退しよう」と呼びかけていました。それを聞いて私はこれはやばいぞと思いました。アメリカ大使館が彼らにそうするように指図したとは到底思えませんでした。しかし、一部のアメリカの保守勢力はひたむきに中国を変えようと思っていたに違いありません。特に彼らはマスメディアを使って中国人の考え方まで変えようと企んでいたと聞いております。

**王星威** しかも当時、香港のある有名なアメリカ人が中国に多額の資金を提供したらしいです。その名はソロン財団といいます。

**侯徳健** その資金は直接政府に提供したものだそうです。つまり、趙紫陽政府です。中国の経済改革及び研究を支援するという名目だったと思います。

**王星威** 趙紫陽基金になったということなんです。

アメリカが長年中国に思いを馳せ、宗教活動を行なって以来、いろいろな団体や人達は中国がアメリカのような国に変化することを望

んでいたわけなんです。それには文化・宗教などが含まれるんです。しかし、そうはいっても、それは必ずしもアメリカ政府の行動によるものとはいえず、アメリカ人の意思であると言えましょう。アメリカの保守派の中にはいろんな人がいます。宗教とも関係がありません。例えば、アメリカ人が台湾でつくった様々な宗教団体のことなんです。そういうアメリカ人のことを一概に保守派だともいえないでしょう。が、しかし、いずれにしても二百年の歴史のアメリカの意思や考え方で世界を改造しようという彼らの企みの表れであることは間違いないと思います。

**侯徳健** いずれにせよ、当時、学生達が援助を求めているということは、私は肌で感じました。と同時にそういう考え方は非常に危険であるとも思いました。

中国政府が当時恐れていたのはアメリカの援助のことでなく、市民やインテリや学生達が独立・自主的な考え方を持つことでした。中国政府は口実が必要だったわけです。つまり、アメリカが学生運動を支援したから弾圧に踏み切ったと全世界に公表したかったのだと思います。

**日比野** 天安門事件以後に、侯徳健さんが北京におられるうちに、日本のマスコミから取材の申し込みを受けられたことはありますか？

ありましたら、それはいつ頃、どの放送局、新聞社で、どんなことを話されたのか教えてください。

**侯徳健** 一つは確かにあるテレビ局の取材だったと思いますが、

どのテレビ局だったのかは覚えておりません。

**日比野** いつ頃ですか？

**侯徳健** 多分一九九〇年、つまり天安門事件の翌年だったと思います。それは旧正月のちよつと前だったのでつきり覚えておりません。

インド、ソ連、フィンランド、そして小さな国々。(アメリカのテレビ局である)CBS、ABCはいつも取材に来たけれども、日本はただ一回だけだったと思います。テレビカメラとか持っていないところを見て、どこかの通信社だなどと思いました。彼らに日本が取材に来たのは初めてであると、私は言いました。天安門事件への対応に日本政府は手を焼いている様子でした。彼らは私の言うことを、にこにこしながらひたすらメモを取るだけでした。

日本の政府と各マスコミの天安門事件の評価は、他の国のそれとは異なるものでした。当時、私は日本政府のそういう対応が腑に落ちなかったのですが、しかし、今になって何故日本政府とマスコミが慎重な態度をとっていたのかがよく分かるようになりました。

私の考え方が正しいかどうか分かりませんが、結局そういう対応しのできなかったのは、中国の天安門事件が日本に飛び火するのではないかという日本の政治家の深謀遠慮による懸念があったからだと思います。

ソ連邦の崩壊からも分かるように、日本の対応はヨーロッパに似ていて、アメリカとは異なるものだったといえます。アメリカはひたすらソ連の変革を求めていますでしたが、ソ連邦崩壊後に様々な問題が

続出することによって、ロシアに恨まれるようになりました。

**王星威** 一つ補足しておきますが、ロシアはアメリカから多額の資金を借りたらしいですが、それも結局エリツィン(大統領)の資金になったと聞いております。彼らの変質はつまるところ、そういうアメリカの支援団体と無関係であるとは決していえないと思います。

**侯徳健** この問題については王さんは専門家ですからね。

ところで、ロシアの原子力発電所が爆発した時も、ヨーロッパはどうしても見て見ぬ振りをするのができなかったんです。というのはヨーロッパにとってそれは対岸の火事ではなかったからでしょう。もし、中国が混乱状態になって大きな問題が起こったとしましょう。アメリカが気軽に手を引いてしまうことは十二分に考えられますけれど、隣国である日本はその対応に戸惑い、途方に暮れてしまうでしょう。このことについて十年前は私も気付かなかったわけです。その当時、日本政府がとった天安門事件への対応には正義感は見られず、おかしいとさえ思ったのですが、今になってもう一度考えてみると、日本の対応がアメリカのそれとは異なるものであってしかるべきだと思えてなりません。

**日比野** ビデオの中でNHKのキャスターが侯徳健さんの証言の信憑性についての個所で、「侯徳健さんは台湾から中国大陸に亡命した有名人でありまして、当局側も処置に困って逆に事件のあと台湾に送り返してしまつた。ですから彼は中国当局には気兼ねなくしゃべれる立場にあつたわけです。ただ私達が逆の心配をしております

た。というのは、彼は三千人ほどの学生や市民を救ったヒーローであるはずなんです。北京にいた時に広場では一人も死んでいないと発言したために、逆に民主化運動を支持する人たちからは中国当局と取り引きしたというありがたくないレッテルを貼られてしまいました。その後あまり多くを語らなくなってしまったのです。今回ようやくカメラの前で口を開いてくれるということになりました」と言っています。

侯徳健さんが中国大陸に「亡命」<sup>(5)</sup>された理由を教えてください。また、事件後に台湾へ送り返した中国政府の理由も教えてください。

**侯徳健** 私の父は四川人です。今、四川(省)には三千人の親族がおります。その中で父だけが軍人として国民党について台湾に渡ってきたわけです。だから子供の頃、父はいつも私に「私達は四川人だ。いずれ四川に帰らなければならない」と口癖のように言っていました。わが家系の伝統によりますと、長男がすべての親族に対して責任を持たなければならないのだそうです。

一九八〇年に私はタイとカンボジアとの国境沿いにある難民キャンプを訪れました。その二〇万人の難民のうち、二万人は華僑でした。タイとカンボジアから台湾へ行くことを希望している人達でした。私は二カ月余りそこに滞在しました。華僑の難民達の生活環境は悪く、中国語で話すことすら許されておらず、本当にかわいそうなものでした。彼らは他の難民からひったくられたり、乱暴されたりしながらも、誰一人カンボジアに戻ろうとはしませんでした。そういうことは国連の難民政策にはそぐわないものであったと思います。

というのも、国連とタイ政府はすべての難民がカンボジアに戻ることを望んでいたからです。私達は難民キャンプに入って小学校を作ったり、教科書を配ったり、募金をしたりしましたが、目的は他でもなく彼らがカンボジアに戻りたがらないという現実を国連に見てもらうためでした。そして彼らが自由にフランス、カナダ、アメリカ、ヨーロッパの国々へ行けるように働きかけたわけです。

**日比野** 侯徳健さんが台湾から中国へ「亡命」された理由は何ですか？

**侯徳健** 台湾に帰ってから私は台湾政府に難民を受け入れてくれるように働きかけたんです。私がお願いしたのは六百人の難民でしたが、台湾政府は六人しか受け入れてくれなかったので私は失望しました。当時台湾政府は世界各国にいる中国人をそのままおきざりにしようとしていたんじゃないかと思います。ひよっとしたら、台湾はスケールが小さく、彼らに同情したいという気持ちはあってもそれを実現する力がなかったかも知れません。それに対して中国大陸は大きいものの、難民のことでは消極的でありました。私は世界各国にいる中国人の生活環境を改善するためには、まず中国政府にメスを入れるべきだと思いました。そこで中国へ行くことを決めたわけです。(一九八三年)二十三歳の時のことです。

今考えてみると、それは若者の愚かな行動にすぎなかったと思います。今の私だったらそんなことはしなかったでしょう。

**王星威** もう一つ補足しておきましょう。その当時の侯さんは台湾では知名度の高い高収入の芸能人でありました。そういう人が中

国に渡るといふことは、台湾での収入をゼロに戻し、実績をないがしろにしてしまうような愚挙である、と、一般人は考えるに決まっています。恐らくNHKはそういうところをとりあげて「亡命」という言葉を使ったのではないかと思います。何故ならその当時の侯さんこそ人気が抜群だったし、お金もあつたし、すべてが順風満帆だったからです。

**日比野** 侯徳健さんは中国政府に難民を受け入れるように交渉されたわけでしょう。

**侯徳健** はい、そうです。受け入れてくれました。中国政府は五万人ほどの難民を受け入れてくれたわけです。その受け入れ先は広西（チワン族自治区）でした。

**王星威** その当時の東南アジアからの難民の半分は中国が受け入れてくれたわけです。しかし、その件については未だに西側諸国に知られていないと思います。

**侯徳健** もちろん、それは私からの働きかけによって実現したものではありません。つまり、中国政府は私が中国へ行く前から難民を受け入れ始めていたのです。それが私からの働きかけによって積極的になったのも否めない事実です。それを後ろ楯に、難民に向かって「中国へ行ってください。そこでは安心して生活できます。何も怖がる必要なんかありません」というふうに通説得することができたのです。

**王星威** そういふふうに通説得された難民達が、今や中国と東南アジアの国境貿易の一翼を担っていると聞いております。

**日比野** 侯徳健さんは天安門事件があつてからいつまで北京にみえましたか？

**侯徳健** 一年間いました。

**日比野** それから、中国政府が台湾へ戻るようにと侯さんに言ったその理由は何ですか？

**侯徳健** 詳しい内容については、先ほど進呈した私の本（『禍頭子正傳』）にちゃんと書いてあります。とても具体的に書いています。香港の某監督もその内容に基づいて記録映画を作ったのですが、その事実について細かく描いています。つまり、私が中国から追い出されたのは天安門事件とはなんの関係もないということです。その当時、私は特殊な身分の持ち主でした。私を逮捕した警察が「あなたがもし中国人だったらとつとくに死刑にされたはずだ」とつぶやくぐらいでしたから。特に天安門事件発生の年に、いつも平気で外国の記者のインタビューに応じたのも私だったし、ややもすれば中国政府を非難したのも私でした。

**王星威** その背景についてももう少し補足しておきましょう。天安門事件の時、広場にいた学生やインテリは逃げたり逮捕されたりしたので、北京にいて、最後まで外国の記者と自由に話ができたのは彼一人だけだったということですよ。

もう一つは、法律的な見地からは侯徳健さんが中国の公民であるか否かを大変説明しにくいということです。

**侯徳健** その通り、私は特殊な身分でしたから。

**日比野** 北京で逮捕された理由は何ですか？

**侯徳健** 反革命的な扇動・宣伝の罪を犯したというのです。

**日比野** どういう運動をしているからという理由ですか？

**侯徳健** 天安門事件発生後、はつきり言って中国共産党が私に迷惑をかけたんじゃないかと、逆に私侯徳健が一方向的に彼らに迷惑をかけたことになるわけです。

**王星威** 彼がいつも外国の記者のインタビューを受けたからでしょう。

**日比野** むしろ侯さんが天安門広場で誰も殺されていないと言ったのは、中国政府にとっては大変利益になるわけではないですか。

**侯徳健** そのことは大変重要だと思います。私、うっかりして言わなかったのですが、それが私のことをどうすることも出来なかった理由であつたと思います。

**王星威** 二つのことが絡んでくると思います。私からちょっと補足しておきましょう。八三年から八九年までの間、彼が中国にいたのですが、中国で、彼は有名な作曲家であり、歌手でもあつたわけなんです。彼は中国政府からいろいろ批判も受けたわけですから、何故彼が天安門広場では誰も死んでいないと言えたかは、広場の学生が撤退するためのトラック隊を手配したのも彼だったし、皆が広場を離れた後も最後まで残っていたのも彼だったからです。世界各国のマスコミは西子門<sup>6)</sup>の場面を流しながらまるで天安門広場で人が死んだかのように報道していたのですが、広場では誰も死んでないとはつきりと事実を言ってくれる彼に対して中国政府はどうしようもなかったでしょう。

もう一つ面白い話があるのですが、広場の戒厳軍は学生が全部撤退した後、空に向けて発砲することで天安門広場で死人がないことを示したと聞いております。その当時、ホテルに閉じ込められていた外国人の記者達にもその銃声が聞こえたはずですよ。

**日比野** それだけではなく、柴玲は戦車が学生を踏みつぶしたと言つて涙を流し、ウアルカイシは少なくとも広場で千人殺されたと言つている映像が流されていたから、それを見たマスコミが本当だと思つた可能性があるのではないですか。

**王星威** そのことについても簡単に説明がつくと思います。論理的に考えて、誰が先に広場を離れたかということだけでも一目瞭然ではないでしょうか。つまり、誰が最後まで残つていて現場の状況を把握していたかがポイントになるかと思ひますけれども。

**侯徳健** 「心臓発作」を起こしたウアルカイシに救急車を呼んであげたのは私です。戦車は広場ではなくて他の所にあつた。学生が完全に撤退した後の九時頃にも長安街にあつたと聞いております。

中国滞在中、度を越したことをしたのは私の方であつて、中国政府ではないと思います。私には私なりの特権があつたし、モデルみたいな目立った存在でもあつたので、ちよつと非難の声を上げるだけで彼らを刺激してしまうおそれさえあつたのです。だから、どうしても私を中国から追い出したかたつたのでしょね。

くだいかも知れませんが、もう一度言つておきます。広場では誰も殺されておりません。逮捕された人達は政府側から皆暴乱分子とい



うレットテルを貼られたそうです。オーストラリア大使館から出てきた私はテレビ局の方に、学生達が平和的に自動的に何の衝突もなく広場から撤退したことを伝えました。

王星威 その当時、北京政府は何千人という人達を逮捕したと聞いておりますが。

侯徳健 何故、私が広場で誰も死んでなかった、学生達は何の衝突もなく無事に撤退したという真相を明らかにしたかについては、あの本（『禍頭子正傳』）に全部書いてあります。<sup>(8)</sup>

王星威 今、中国も台湾も彼の歌を全部禁止しています。極端なことをいえば、中国では「龍の伝人」という歌の作詞・作曲者である侯さんの名前もはずしていると聞いております。

侯徳健 権力があつたら傲慢になると一言に尽きます。その時、私にそういう特権がなかったならば、もう少し理想的に、穏便にことをすませたかも知れませんね。

日比野 今、お仕事は何をされていますか？

侯徳健 易経の仕事をしております。つまり、ニュージーランドにいた時から易経の勉強をしておりまして、今は台湾でそれを教えております。

先ほど進呈したもう一冊の本（侯徳健・王泰權共著『2001大終結』）は、その易経に基づくものです。

日比野 いろいろありがとうございます。



会談後、隨縁居にて左から林清祥氏・郭庭志氏・筆者・侯徳健氏・王星威氏

注

(1) 事件の二カ月後に中京大学教授丁秀山氏が、間違った情報に振り回されることなく〈冷静に天安門事件を考えよう〉という一文を日中友好愛知県婦人連盟の『通信』に発表した。すると、名古屋在住の中国人留学生達を中心となって、丁秀山は中国政府の代弁をしているとして、「打倒丁秀山」の署名運動がなされた。

当時の報道の結果は今日においても影響を及ぼしている。

「天安門事件の時に天安門広場で多数の死者が出たかどうか」と友人や知人に尋ねてみると、ほとんどの人から「出た」という答えが返ってくる。それは日本人ばかりでなく、中国国内においても事実を反した情報が流されていたようで、中国からの留学生達に同じ質問をして「多数の死者が出た」と答える人が多い。

天安門事件後、一九八九年八月〜十二月にこの事件に関する学生のビラ・戒厳部隊の布告等を編集した矢吹晋編訳「チャイナ・クライシス重要文献」三巻（蒼蒼社）が、九〇年八月には村田忠禧編「チャイナ・クライシス「動乱」日誌」（蒼蒼社）が出版された。

そして、矢吹晋氏が八九年二月四日の読売新聞夕刊に〈天安門広場での虐殺はなかった〉を発表し、九〇年六月・九月には矢吹晋編著「天安門事件の真相」上・下（蒼蒼社）が刊行され、九三年六月にNHKが〈天安門事件・空白の三時間〉を放映し、九四年三月には村田忠禧氏が〈八九年天安門事件における「虐殺」説の再検討〉（東京大学教養学部外国語科紀要第四一巻第五号）を発表して、三者ともに天安門広場での「虐殺」はなかったことを実証している。

このように専門家の科学的な研究やNHKの放映によって事件当時の報道の誤りが究明されているにもかかわらず、朝日新聞は事件後十年目の朝刊紙面で、天安門広場で惨劇があったと書いていた。

そこで筆者は次の一文を朝日新聞社編集局宛に送った。

（もつとも、筆者は不勉強であつたので、本稿を作成する寸前まで矢吹晋氏や村田忠禧氏の斯様な業績があることを知らなかった。）

前略 私は貴紙を購読している者ですが、去る六月四日朝刊の記事で疑問に思った点がありましたので一筆啓上することにしました。当日の社説の冒頭に「北京の天安門広場で、惨劇が起こってから今日でちょうど十年になる。」とあり、三一面にある「天安門事件」の解説記事の中に「人民解放軍は六月三日深夜から四日未明にかけて、中国・北京市内の天安門広場で学生や市民に対して無差別に発砲し、武力弾圧。正確な数字は不明だが、死者約三千七百人、負傷者約一万人とも推定される。」とあります。（傍線は小生が付記）

しかし、本当に天安門広場で惨劇が起こったのでしょうか？

一九九三年六月三日に放映されたNHKのクローズアップ現代「天安門事件・空白の三時間に迫る」では、「事件」当日、天安門広場で取材をしたスペイン国営テレビの映像と証言、また天安門広場において行動した台湾出身の侯徳健の証言によって、天安門広場では惨劇が起きていないことを示しています。

そこで、貴社が「天安門広場で、惨劇が起こった」と云われる根拠となるものがございましたら、それをお教えいただければ幸いです。謹言 一九九九年六月六日

追伸 NHKの〈天安門事件・空白の三時間に迫る〉は、録画した

ものを持っていきますので、もし必要でしたらお貸しします。

数日後に朝日新聞社から「暫く待ってほしい」という電話での返事があつたけれど、いまだに具体的な回答はない。

本稿作成中に、朝日新聞社の社内報「朝日人」(八九年八月号)に、事件取材のために東京から北京に駆けつけた外報部の永持裕紀記者の「助っ人奮戦記」が載っていることを知った。

早速、国会図書館から取り寄せて読んでみると、臨場感あふれる体験記である。一九八九年六月四日、天安門広場の中にいたジャーナリストは極めて数が少なく、現場にいた永持記者の体験記は資料的価値が高い。題して「忘れられぬ「栄養ドリンク」 広場で学生と運命共同体を実感」は次の通り。(小見出しは省略)

天安門広場で、六月四日に飲んだ「栄養ドリンク」の味が忘れられない。

ドリンクといっても、特大の金だらいに入れた水に、白っぽい粉末を混ぜただけ。学生たちによると、粉にはカルシウムなどが入っているという。混ざり切らず、水の上に浮いている。それをおわんにひしゃくで入れてもらい、学生たちはごくごく飲み干していった。

ドリンクの補給所が置かれたのは、広場真ん中にある人民英雄記念碑だ。広場で座り込みを続けていた学生たちは軍が広場めざし進撃していることを知り、四日午前零時すぎから、ほぼ全員がここに集まった。私は同じところから、記念碑から三十メートルほどのテントの陰に陣取った。そこに、学生が兵士に記念碑を追い出された午前五時すぎまで居残った。

北の天安門側から南端まで歩くと十四、五分。東西の短い辺は、

五、六分。これが広場の空間感覚だ。テレビでよく流れた「燃える装甲車」の場面が展開されたのは、正確にいうと広場の外側、天安門の真下の東長安街という道路である。記念碑から見ると炎はかなり遠くに感じた。「一体何が燃えてんだろ」という感じだった。

これに限らず、とにかくドンパチドンパチやっているテレビ画面は広場の外のほうだ。日付が四日に変わると広場の、少なくとも記念碑周辺にはテレビクルーはいなくなった。

外側のそうした阿鼻(あび)叫喚から、すっぱりエアポケットのように静かだった記念碑で、私が栄養ドリンクを飲んだのは三時十五分。「肝臓が怖い」(！)と手を出しかねていたが、のどの渴きに耐えかねた。「元気の素」は甘くも何ともなかったが、学生とは完全に運命共同体になったな、と思ったものだ。

そのころ学生は、というところ、「死を恐れず」などと書かれた鉢巻きを締めながら、こっくりこっくりする姿が目立った。近くにはジュースの空き瓶、たたくとペしゃりとなりそうな竹の棒が並べられてあった。こういうもので応戦するのかなあ、と思った。赤い大鼓もあった。

武器ともいえないそうしたものを、学生たちは結局使えなかった。四時四十分には記念碑に現れた兵士たちが持つ本物の武器の迫力は、想像以上だった。威嚇射撃をすると、ターントーンという銃声があった。広い広場に響きわたる。これを間近でやられた学生たちの恐怖は相当なものだったはずだ。ギャーといった叫び声は聞こえなかったが、多くは下を向いて、必死に耐えている様子だった。

何が次に来るか、と小さな私も怖かったが、兵士が学生めがけ機

関銃を乱射——ということではなく、学生たちは退去を命じられた。学生がぞろぞろ記念碑を後にするのに私もそのまま従った。

「天安門広場の虐殺」というフレーズがよく使われる。今回の惨劇を象徴するものとしてそれはそれで良いと思うが、「虐殺」は実際は広場の外の北京市街地が主な舞台だった。広場、特に人民英雄記念碑は新中国の中心の中心。そこを真っ赤に染める戦略を、さすがに中国指導部は取らなかったのではないかと推測してみる。もっともそのおかげで私も無事でいられた。午前七時半、広場から五<sup>分</sup>離れた北京支局までたどり着くと、斧支局長にはそりと言われた。「東京には君は生死不明と言っている。僕はお経をあげておいてあげたよ」。ご心配かけました。

これによると、朝日新聞は天安門広場で死者が出なかったことを事件当時に知っていたのではないか。それなのに何故、その事実を報道しなかったのだろうか？

事実を知っていても永持記者が書いてるように、長安街等での死者が出たことを、天安門広場にすり替え「惨劇を象徴するものとしてそれはそれで良い」と思っているのだろうか？

この朝日新聞社の社内報と新聞の問題については、蒼蒼社発行の『蒼蒼』第三五号（九〇年一二月）において、矢吹晋氏が〈新聞週間に寄せて—社内報の伝えた真実、新聞の伝えた虚報〉と題して追求している。

(2) この番組の企画・制作を担当したNHK北京支局長であった加藤青延氏の〈NHK「クローズアップ現代」「天安門事件空白の三時間」裏話〉が、『蒼蒼』第五一五二号（九三年八月・一〇月）に掲載されている。

これは放映された番組だけではわからないさまざまな事柄を知ることができ、資料的価値が高いものである。筆者が侯徳健氏に会見する前に、この〈裏話〉を読んでいたら本稿の内容を深めることができたであろう。

(3) リチャード・ゴードン、カーマ・ヒントン製作・監督の『天安門』には、柴玲がアメリカ人記者カニングガムのインタビューに泣き声で応えているのが、次のように収録されている。（日本文は字幕）

近頃とても悲しいのです。学生は民主化の意識が欠けています。ハリストを決めた日から結果は出ないと分かっていました。挫折していった人たちもいます。すべて分かっているんです。でも弱みは見せられない。目指すは勝利だと言わないと。でも心の奥で空しかった。のめり込むほど悲しくなって、四月からずっとそうです。でも胸に秘めてました。中国人の悪口は言いたくないけど、時々はこう思わずにはいられません、あんたら中国人のためになんで私が犠牲になるの！

ただ運動を通してすぐれた人にも大勢出ました。立派な学生や労働者や市民や知識人たちに。

学生はいつも「次は何をする？」と言います。私は悲しくなりま

す。目指すは「流血」なんて誰が言えます？

政府を追いつめて人民を虐殺させる。広場が血に染まって初めて民衆は目覚める。それで初めて一つになれる。これを学生にどう説明するんです？

すごく悲しいのは一部の名の知れた学生が政府のために働いたこと。運動の崩壊を企んだこと。私欲に駆られて政府と取り引きし、運動をつぶそうとした。政府が事を起こす前に撤退を企んだので

す。運動の崩壊を許せば、政府は次に運動の指導者全員をつぶします。党の指導者や軍隊の指揮官ら、人民のため党に背いた人々を鄧小平はつぶします。党や社会の少数の反乱分子だけでなく、学生たちまで。そんなこと同志の学生にとっても言えない。人民を立ち上がらせるために我々の血と肉が必要だなんて。学生は喜んで死にます。でも、あんなに若いのに。

(インタビュアーの質問……あなたは広場に残りたいたい？)  
いいえ。

(インタビュアーの質問……なぜ？)

私は司令官でブラックリストに載っているから。政府に殺されたくはありません。私は生きたい。人は私を自己本位だと言うかも知れない。でも誰かが私に続いてくれる。民主化運動は一人ではできません。

(4) 「広場では誰も殺されていない」と言ったのは侯徳健氏のみではなかったようである。

侯徳健著『禍頭子正傳』（一九九〇年一〇月）の〈天安門広場のもう一人の目撃者との対談〉には、次のような対談が載っている。

内氏：侯さん、私は Nations と申します。今年四四歳で、アメリカ人です。曾て香港の《遠東経済評論》という週刊誌のために仕事をすることがありますが、今はイギリスの《観察家報》のために仕事をしております。一九八九年六月四日、私はずーっと天安門広場において、朝六時になってやっと学生たちと一緒に広場を離れたわけです。

侯：最後まで広場に残っていた外国の記者はいないと思えますが。  
内氏：いいえ、私のほかにもまた美聯社の記者三人とスペインテ

レビ局のカメラマンが二人それぞれ、広場と記念碑の近くにいたと思います。

侯：あなたは広場で大虐殺が行なわれたのを見ましたか？

内氏：いいえ。広場で殺された人を一人も見えておりません。

侯：スペインのカメラマンは何を撮られたのでしょうか？

内氏：私と同じように、死者を撮ることができなかったでしょう。つまり、天安門広場ですよ……。

侯：では、外国のテレビが何故広場で人が殺される画像を流すことができたのですか？

内氏：それは多分広場を離れたスペインテレビ局の二人のカメラマンが、六部口という所で撮った場面を広場で死者が出たかのようにつけて流したものでしょう。

侯：どうしてそのようなミスが生じるのでしょうか？

それに対して二人のカメラマンは抗議をしないのですか？

内氏：それは恐らくテレビ局の記者とカメラマンが同じ場所になかったために生じたことだろうと思います。つまり、テレビ局の記者は天安門広場から離れた所において、外交ルートを通して得た間違った情報をそのままスペインのテレビ局に伝え、テレビ局の誰かがそれをまた編集して流したのだと思います。不幸なことに、それが間もなく、スペイン全国に放映され、スペインの高官はまたその偽りの情報をEU各国に紹介し、取り返しつかない結果をもたらしたのです。

侯：真相が明らかになってからスペイン政府はその件について訂正を行ないましたか？

内氏：いいえ、何も行なっておりません。問題の重大さを感じた

スペインテレビ局は、そのような訂正を行なうことによって信頼が失われ、権威が地に墜ちることを恐れたからでしょう。

侯：そのほかに原因があるのでは……。例えば視聴者が一般の報道を信じこんで、新しく正しい情報を聞き入れてくれないとか。

内氏：その通りだと思います。去年の六月から今日に至るまで、私は、天安門広場で目撃した事実を如実に取り上げるたびに、攻撃を浴びせられました。皆、中国共産党は悪魔であるから天安門広場で学生を虐殺したに違いないと言っているのです。

侯：私は、中国共産党の、六月四日北京における大虐殺は極めて野蛮的であり、恥じらうべきであると思います。だから、泥を被っている彼らに、情報を偽ってまでもつと泥を被せようとする必要があります。偽りの情報でよく嘘を吐く敵に攻撃を浴びせるのは愚の骨頂であるとしか言いようがありません。誰かが嘘を吐いてもいずれ真相が白日のもとにさらされ、敵は逆にそれをもつてその誰かを攻撃するでしょう。

内氏：もつとはつきり言わせていただきますと、マスコミは大袈裟に中国共産党の暴挙を報道したりしたけれども、結局、彼らに裏をかかれた羽目になったのでは……。マスコミは血眼になって彼らの暴挙を糾弾しようとしたが、その反面、中国人民の反ファシズム的な精神を等閑にし、六月四日の民主化運動の本質、つまり、平和的に人権を獲得したいという積極的な意義を疎かにしたきらいがあります。

侯：今日に至るまで、天安門広場から学生たちが平和的に撤退したという真実を再三再四にわたって証言し強調した故は、中国共産党の暴挙を弁護するためにあるのではなく、天安門広場にお

る学生や市民の平和的かつ理性的な行動を更に浮き彫りにすることにあります。申すまでもなく、こうすることによって逮捕された民主化運動の関係者に有利に働くことは明らかであります。更に長い目で見れば今後の中国の民主化運動に有意義であると言わずにはいられません。若し、劉曉波・周舵・高新と私四人が広場で踏ん張っていた学生や市民を説得したり、戒厳軍と談判をしたりしなかつたらば、中国共産党は血腥い弾圧を行なったでしょう。そういう意味でも、平和的に広場から撤退できたのは中国の民主化運動の勝利であり、我々の勝利であると私は固く信じて止みません。だからと言って中国共産党はその事実に基づいて自分自身を美化することは決して出来ないと思います。

『天安門事件の真相』（上）を著わした矢吹晋氏に対して、外野席から次のような声があがったという。（『蒼蒼』第三五号の「新聞週間に寄せて―社内報の伝えた真実、新聞の伝えた虚報」）

「あんな細部にこだわる意図が分からない」「動機不純である」

「中国当局に迎合してあんなデタラメを書いたに違いない」

「あいつは×××主義者だからあんなバカげたことを書いた」

「真相が分からないときに、断定するのは研究者として軽率である」「仮にその分析が正しいとしても、民主化運動にマイナスである以上、当面は書くべきではない」その他、その他。

北京在住の日本人の間で、天安門事件を体験した人々を「戦中派」と呼ぶことが行なわれていますが、その戦中派の間での私への酷評はたいへんなものだったそうです。罵倒を耳にした私の友人が「魔女狩りの雰囲気」と嘆いたほどでした。

これら、事実を表明したり、事実を追求する者に対する非難・中傷

は、その事実が自分にとって都合が悪いとか間違った認識を信じている者達によって発せられる場合が多い。そうした間違った認識をマスメディアが大衆に提供したとすればその罪は重い。

侯徳健とネイシヨンス（内氏）との対談では次の点にも触れている。広場で人が殺されたかのような画像がスペイン国营テレビによって「スペイン全国に放映され、スペインの高官はまたその偽りの情報をEU各国に紹介」したとネイシヨンスが発言していることである。

このスペイン国营テレビの問題について、『蒼蒼』第五一号（九三年八月）に、NHK「クローズアップ現代」「天安門事件空白の三時間」裏話」と題して、加藤青延氏が次のように述べている。

（前略）事件の直後、スペイン国营テレビの映像がどうして軽視されたのかという問題は、同業である私たちにとっても、きわめて大切な問題です。

そのひとつの理由は、このあとご紹介するレストレポ記者の証言の中で出てまいります。その他にも、いくつかの理由があったものと考えられます。まず、当時は、北京からの衛星中継が停止されていたため、取材した映像素材が、様々なルートで世界中に送り出され、それが映像の管理を難しくした点です。NHKの映像素材も、大量のビデオテープが香港や東京、大阪、名古屋など各地にばらばらに届けられ、それをさまざまなラインを通じて伝送するという手段が取られました。アメリカのテレビ局の場合も、あるものは香港、あるものはアメリカ、またあるものはヨーロッパへと分散して発送されました。しかも、取材したカメラマンと最終的に映像を編集するディレクターとの間で、こまかい内容の確認をしあう余裕はほとんどなく、受手の方では、その映像の中

身を正確に把握できないケースもままあったと推定されるのです。さらに、撮影した映像が、中国の外にしばらく持ち出すことが出来ず（持ち出そうとして没収の憂き目にあうケースもあったようです）、事態の変化の中で、時間的にニュース映像としては古くなってしまったものも少なくありませんでした。

また、スペイン国营テレビの映像が、ほかのテレビ局の映像に比べて、極めて地味であったことも軽視されてしまった理由のひとつと考えられます。当時、西側のテレビ局には、長安街で練り広げられたはでな立ち回りの映像が、大量に届けられていました。その中に、広場で学生が座り込んでいる（一見すると前夜の光景とそれほど変わらないような）映像が延々とあったところで、使用に耐えないと判断され、衛星中継のネットワークからはずされた可能性は十分ありうるのです。衛星中継の費用はきわめて高額なので、無駄な映像をだらだら送ることは避けるのが普通です。ひとつの例ですが、サッカーの試合を撮影した膨大な映像を、ニュース素材として編集して衛星中継する場合、豪快なシュートや華麗な選手のプレーはまず間違いなく送られるのですが、ボールが相手側ゴール前にあつてひとり手持ち無沙汰にしているゴールキーパーの映像（そんな映像があること自体少ないのですが）などは、まず間違いなくカットされてしまうのは、経費節約の面からも致し方ないことなのです。スペイン国营テレビの地味な映像も、そんな判断から、埋もれてしまい、NHKを始めとする主要テレビ局に映像がほとんど届かなかつた可能性が考えられます。さらに、スペイン国营テレビの映像を処理した人の中に、中国語を聞き取れる人がいなかったため、映像とともに記録されていた

音声部分には注目せず、その価値を見抜けなかった可能性もあります。もともと、中国側の資料をもとにある程度、当時の状況を把握していなければ、スペイン国営テレビの映像の持つ意味すら理解できなかった可能性も考えられます。

こうした、いくつかの要素は、スペイン国営テレビの映像をどう処理するかというテレビ局側の政治的な判断以前の問題として、考えられるのです。(中略)

〈スペイン国営テレビ レストレポ記者へのインタビュー〉  
(前略)

問：ロケをしたテープはどうやって国外へ持ち出したのですか？  
レストレポ記者：テープはすべて人が運びました。われわれはアメリカのABC「TV会社」と提携しており、翌朝ABCの人間が飛行機で香港へ運び、そこから世界に配信されました。

問：六月四日のニュース用には、どのようなリポートをしましたか？

レストレポ記者：前にも言いましたように、素材を衛星を使って送ることは不可能でした。中国当局によって回線を切られていたので。それで香港へ出す必要があったのです。もちろん翌朝「六月四日」です。私は当然、その素材を見ていませんでした。ですから私の電話リポートは、前の晩に見たことを、正しく解釈されることを想定して、思い出しつつ行なったのです。

残念なことに——この点は大切なので強調したいのですが、ジャーナリストとして私が学んだのは、その時に人は歴史の重要な一頁に身を置いているとはなかなか考えないことです。「天安門広場の虐殺」という話は後から聞きました。電話リポートを送るときに、

マドリードの私の同僚たちが他の国と同様に「天安門広場の虐殺」という決まったイメージを持っていたとは考えませんでした。私は錯綜した情報をかき集め、順序立てて送ったつもりでしたが、マドリードにいる同僚たちは、「天安門広場の虐殺」というステロタイプの見方しか持っていませんでした。おまけに彼らが受け取ったテープも色々なものが順不同に混ざったものだったので、よく理解できず、結局彼らは国際通信社やプレスの言うことに立脚したコメントを付けてしまいました。結果として、スペイン・テレビのニュースは事実を歪めるものとなってしまったのです。残念なことですが、逆説的なことに、この特ダネ映像が混乱した状況において、事実とは違った事件の話を作り上げることになってしまいました。香港の編集マンはわけが分からなかったでしょう。戦車、死体……やはり虐殺だ、と。

問：あなたがたと同じように広場に残ったメディア、ジャーナリストはいますか？

レストレポ記者：ええ。しかしテレビではありませんでした。

一晩中広場にいたのは、スペイン・テレビだけでしたから。ただし、CBS「テレビ」は、「三日」夜一時頃、逮捕されるまで広場にいました。われわれが到着する前です。われわれが遅れて着いたのは、まったくの幸運でした。ほかにはあの時間にあそこに入るなどというクレイジーはいませんでした。しかし確かにCBSのクルーはいました。ほかには『エクスペクター』誌の東京特派員、それに香港のロイター記者、また数人の活字メディアの方々がいました。

問：九〇年度にスペイン国営テレビは三〇分番組を作りましたが、



その中ではどう報告しましたか？

レストレポ記者：天安門事件一周年の番組の中で、私の見た通りの事実を再現したいと思っていました。しかしこの番組のディレクターは「天安門広場の虐殺」にこだわり、私が見た通りのことを言っているにもかかわらず、聞き入れませんでした。これも事実を混乱させただけです。

問：なぜあなたはそうせざるをえなかったのですか？

レストレポ記者：それは内部の問題で、どこのテレビ局にもあることでしょう。あるディレクターが自分の好みの方向性をもっていて、私のそれとは違っており、結果的に私はコメントを、特に前半について変えました。後半はそれでも起こった通り、撮れた通りに作りました。

しかし実際にディレクターは、そのような方向性を持っていて、別に事実を曲げたかったわけではないでしょうが、まあ個人的な気紛れとか先入観とかいったものでしょう。彼に聞かねばなりませんね。

問：それでは今に至までスペインでは、他の国々と同様「天安門広場の虐殺」ということになっているのですか？

レストレポ記者：天安門広場の真相を隠した要素は、三つあると思います。一つには、極端な状況にあったということ。まず香港に運ばれたテープが今度は衛星でスペインまで送られ、混乱は極まりました。これは重要です。

第二に、この素材は唯一世界に存在するものであり、したがって他に比較検討すべきものがなかったということ。このこと「ビデオに映された事実」が「あった」「現実に存在した」と証明する他

局の映像が無かったこと。

第三に、これを言うのは嘆かわしいことですが、当時のわが社のリーダーシップが、誤った報道を正しくやり直そうとしなかったためです。われわれの持っている素材を使って事実を再現すべきでした。しかし実際には、もう一度誤りを繰り返したのです。当時、唯一状況を正しく説明できる私をマニラから呼び寄せて正しい報道を試みるという判断を当時のディレクターは下せませんでした。

このように、スペイン国営テレビ局は、自局のスタッフが六月四日の天安門広場で取材した貴重な映像と証言を抹殺してしまった。しかし、それはジャーナリストとして真実を伝えたいレストレポ記者やNHKの加藤青延氏によって、地球の裏側の日本で活かされた。

(5) 『岩波現代中国事典』の侯徳健の項では次のように記されている。

一九五六一 中華民族のアイデンティティーを歌で問い続ける台湾のシンガーソングライター。七八年、民族のルーツを巨大な龍に託した「龍的伝人」を発表。李健復が歌ったこの歌は、米国の国交断絶に直面した国民党政府の思惑もあり、孤立感を深める台湾人の心をとらえた。その後、映画「搭錯車」の挿入歌「酒研償売無」などを手がけるが、八三年、台湾に失望し、香港経由で中国大陆に亡命。台湾で侯の作品は放送・発売禁止となる。八九年六月、天安門事件の際、劉曉波らの三人の知識人とともに学生たちのハンストに参加。広場を包囲した軍と学生との交渉役も務めた。その後、北京の外国大使館街に身を潜めていたが、事件の一年後、大陸の現実にも失望し、民族の理想像を見つけれないまま台湾に送還された。

このように、この事典では「中国大陸に亡命」と表現されている。NHKの〈天安門事件・空白の三時間に迫る〉においても「亡命」と表現されており、このNHK放送を軸にして筆者は質問していたので、ここであえて「亡命」と言ったけれども、この表現は適切でないと考えられる。

それは、侯徳健が「戸籍を抜けて逃亡すること」(小学館『日本語大辞典』)をした訳ではない。そして法律的観点から、難民は「人種、宗教、国籍若しくは特定の社会的集団の構成員であること又は政治的意見を理由に迫害を受けるおそれがあるという十分に理由のある恐怖を有するために、国籍国の外にいる者であつて、その国籍国の保護を受けることができないもの又はそのような恐怖を有するためにその国籍国の保護を受けることを望まないもの及びこれらの事件の結果として常居所を有していた国の外にいる無国籍者であつて、当該常居所を有していた国に帰ることができないもの又はそのような恐怖を有するために当該常居所を有していた国に帰ることを望まないもの」と定義(難民条約・難民議定書)されており、国際法上において難民は亡命者(難民)と同一用語(refugee)の邦語訳である(国際法専門家松本祥志氏談)ので、侯徳健は必ずしも難民に当らないからである。

- (6) 死傷者が出た場所。
- (7) オーストラリア大使館に入ったことについて、前掲『禍頭子正傳』の〈禍頭子、オーストラリア大使館に避難す〉で、次のように記している。

一九八九年六月四日、午前八時、劉曉波と私は医者に支えられて病院に入った。断食は四十時間しか経っていないのに何も食べたくなかった。ただ二日間一睡もしていないので眠くて目を開ける

ことができなかつた。ベッドにそのまま倒れ、目が覚めたのは午後四時であつた。

目が覚めてから、一番最初に思ったのは何処へどういうふうに行くのかということであつた。大虐殺があつた翌日の午後の北京は恐怖に包まれていたのである。病院も安全なところではない。公安警察が戒厳軍に協力し、各病院における暴乱分子の捜査を開始していると聞いたからである。ある人が自分の家に避難してはどうかと言ってくれたけれども、曉波と私はその人に迷惑がかかると思つて思つて応じなかつたのである。いろいろ考えたあげく、私はある外国人の友人に電話して、外交官の住宅に行くことを決めた。私は医者に変装し、サングラスをかけ、さまざまな危険を冒して迎えに来た車に乗り込んだ。

六月四日の夜、私は友人の外交官のマンションに閉じ籠り、窓際で固唾を呑んで、西の方から東の方へ向かうタンクや装甲車を数えていた。廿七軍と廿八軍が衝突したという噂を耳にして、私は密かに「国民党が長年大陸を攻略すると言いつつ触らしていたのに、今はその勢いが跡形もなく消えてしまったんだなあ」と思つていたのである。

六月五日の朝起床して、窓越しに覗くと建国門の立体橋の上に待機しているタンクや装甲車や兵士たちの姿が目にとまる。砲口はそれぞれの道路に向けられ、あたかもこの橋を経由して天安門広場に向かう敵を待ち構えているかのように。道端に放置されている軍の故障した車に火をつける怒り狂った市民たち、燃え上がる炎を消そうともしないで、見て見んぷりをする橋の上の兵士たちが印象的であつた。

六月五日の午後、ある友人が私のパスポートを取ってきてくれたし、また他の友人が航空券を予約してくれたが、彼らの話によると航空会社は上の許可を待たずに航空券を切ってくれたという。皆が私に早く大陸から離れるように勧めてくれたけれども、晁波・高新たちが途方にくれている様子を見て、どうしても後ろ髪を引かれる思いがしてならなかった。お互いに不安げに見つめあうだけで、次に何が起こるのか誰一人予想がつかなかったのである。

六月六日の午後、空港へ行く車が手配できないというので、もう一度変装し、オーストラリアの大使館に入って、翌日大使館のバスで空港へ行き、十時の飛行機に乗るという計画を立てた。大使館の中では、何人かの友達と一緒に友人の外交官の事務室に隠れていた。夜十一時十五分、晁波の友達から電話があった。彼は十分前に東単の近くで、マイクロバスから出てきた人たちに晁波さんが連れ去られたことを生々しく言ってくれたのである。それを聞いた私たちは驚き、誰一人口をきこうとしなかった。大使館内は、オーストラリアからの留学生や商人や外交官の家族で一杯であった。皆、チャーター機を待っていたのである。皆、恐怖のどん底におちいり、大使館内は嫌な沈黙が流れていた。私は残ることを決めた。人に迷惑をかけたくないし、もしかしたら空港では、安全局の連中が私の自ら網にかかるのを待っているかも知れないし。

六月七日の午前、空港へ向かう友人たちの、私に対する別れの挨拶はまるで永遠の別れの挨拶のようなもので、ぎこちなかったのである。ということでは私はオーストラリア駐北京大使館に残ることになった。

その後「私（侯德健）が中国政府を批判しない限り、逮捕されないという中国政府とオーストラリア政府の合意でオーストラリア大使館から出ました」（侯德健氏の筆者宛書簡）。

(8) 注(4)に掲載した〈天安門広場のもう一人の目撃者との対談〉最後の部分にその理由が述べられている。

#### 追記

NHKの〈天安門事件・空白の三時間に迫る〉を見た筆者は、それに登場した侯德健氏にもっと話を聞きたいと思って台湾に出張した。ビデオ撮影をしたのは発言内容を正確に知るためであったが、その後、それに基づいて会見記を作成することにした。すると〈注〉を書くにあたって天安門事件についてより深く知る必要が生じ、関係書籍や資料を捜し求めた。その中に特に印象深い論文があった。

それは一九九三年に「日本現代中国学会」で報告され、その内容を踏まえて大学の紀要に掲載された村田忠禧氏の〈八九年天安門事件における「虐殺」説の再検討〉である。

この論文の一部分を紹介して、本稿を閉じたいと思う。

〔裏付けも定かでない伝聞情報を恰も真実であるかのごとく扱うことは、マスコミがよく犯す過ちであるが、同様なことを研究者が行って、しかもその後、誤った判断をしたことが明白になっても、自説に固執し、改めようとしなないことは、研究者として恥ずべきことであり、過去の過ちに固執せず、誤った判断をした原因を究明し、是正する姿勢がぜひとも要求される。〕

そしてエピソードとして、村田氏が学会でこの報告をした時、

「天安門広場での虐殺の有無の問題は決着済の問題であって、いまさら取り上げるまでもないことではないか、というような主旨の反論を受けた。しかし筆者はともそのように楽観的に考えることはできない。まだまだわれわれは脳裏に刷り込まれた「虐殺幻想」を払拭できていないのである。」

と、述べられている。

なお、この論文はインターネットによって全文を読むことができることを付記しておく。